

『楚辞』 九章諸篇における主人公の彷徨

大野 圭介

『楚辞』 九章の諸篇のうち、哀郢と涉江には、登場する主人公が楚の各地を彷徨する描写が見られる。これらの彷徨は、同じ『楚辞』の九歌に見られる神々の遊行や、離騷に見られる天上世界や神話的な辺遠の土地への遊行とは異なり、現実の土地を彷徨するものであることから、従来は屈原が郢都を追放された後の放浪をそのまま反映したものと解されてきた。

しかしこれらを仔細に見ると、涉江における彷徨は、離騷における遊行とどこかで重なるモチーフを持つが、哀郢にはそれが見られない。また涉江では重華（舜）とともに崑崙に遊ぼうとしながらそれがかなわないことがうたわれ、離騷において蒼梧山で重華に自らの志を述べてから天上へ旅立つのと好対照をなしている。

本稿は九章の主人公の彷徨について、哀郢・涉江を中心に、その性格の分析を試みるものである。

一

楚辞において主人公が天上や地上をあまねく周遊する描写は、九歌と離騷に顕著に見られるものであり、この二者についてはこれまで多くの研究がある。まずこれらの遊行について確認しておこう。

九歌では、神の遊行とみられる場面が登場する。九歌・雲中君には

嘗將檐兮壽宮、與日月兮齊光。龍駕兮帝服、聊翱遊兮周章。靈皇皇兮既降、森遠舉兮雲中。覽冀州兮有餘、横四海兮焉窮。

ああ、(雲中君は) 寿宮の祭殿に安らぎ、日月にも等しく輝く。龍駕に乗って天帝の服を着、今しばらく天がけて遊び、緩やかにたゆたう。霊は輝かしく降^{くだ}られたが、つむじ風の如く遠く雲中が上がって行かれる。冀州を天からご覧になるばかりか、四海の果てまで広く窮められよう。

と云い、天を自在に周遊する雲の神が描かれる。ここでは神は一旦降臨はするものの、すぐに雲へと帰ってしまい、近づき難い存在である。一方で河伯には祭祀を行う者が神とともに遊行する場面がある。

與女遊兮九河、衝風起兮水横波。乘水車兮荷蓋、駕兩龍兮駘螭。登崑崙兮四望、心飛揚兮浩蕩。日將暮兮悵忘歸、惟極浦兮寤懷。

……

與女遊兮河之渚、流澌紛兮將來下。子交手兮東行、送美人兮南浦。波滔滔兮來迎、魚鱗鱗兮滕予。

なんじ河伯と黄河に遊べば、はやてが巻き起こって波を立てる。水を走る車に乗って蓮の葉を覆いにし、二頭の龍に引かせてみずちを添え馬にする。そうして崑崙に登って四方を望めば、心は高揚して広々とのびやかになる。ところが日は暮れようとして心は帰らないあまり悲しみに包まれ、はるかな水辺を忘れがたく思うのだ。

なんじ河伯と黄河の浜に遊べば、流水が入り乱れて流れ下りてくる。あなたと手を取りあって東へ向かい、あなたを洛水の南浦までお送りした。すると波は滔々とやって来て迎え、魚は鱗を連ねて私たちに付き従った。

河伯との遊行が祭祀者の視点から描かれ、連れ立って遊行した後、神は東へ去っていく。九歌の遊行は神が行うものであり、時に巫のよ

うな祭祀者も同行できるものであった。

離騷においては、主人公である靈均の遊行が描かれる。しかしそれは九歌のものとはかなり性格が異なる。追放されてもなお志を曲げない主人公に、女嬃が舜帝廟へ行くよう勧め、そこで天界遊行への決意を固める。

朝発軻於蒼梧兮、夕吾至乎縣圃。欲少留此靈瑣兮、日忽忽其將暮。吾令羲和弭節兮、望崦嵫而勿迫。路曼曼其修遠兮、吾將上下而求索。朝に蒼梧から車を出し、夕方には私は崑崙の県圃にたどり着いた。しばらくこの靈域にとどまろうと思ったが、日は急いで暮れようとしている。私は太陽の御者羲和にその速さを遅らせ、太陽の沈む崦嵫の山を望みながら近づけないようにさせよう。道ははるかに長く遠く、私は上下しながら天界を探し求めようとした。

かくて主人公は天界遊行を始めるが、天門に入ることを拒絶され、あちこちと経巡りながら女神たちに働きかける。しかしそれも拒絶され、一度天界遊行を中止する。

その後靈氛の勧めで二度目の遊行に出る。

朝發軻於天津兮、夕余至乎西極。鳳皇翼其承旂兮、高翱翔之翼翼。忽吾行此流沙兮、遵赤水而容與。麾蛟龍使梁津兮、詔西皇使涉予。朝に天津から車を出し、夕方には私はこの西極にたどり着いた。鳳凰はつつしんで龍の旗を捧げ持ち、高く天がけりながら恭しく付き従う。もう私はこの流沙を行き、赤水の流れに従ってたゆたう。蛟龍をさしまねいて橋を架けさせ、西皇少皞をまねいて私を渡らせる。

この後主人公はついに現世を放棄し、彭咸の住む絶対的な天の高みへと登っていくのである。ここでは主人公が遊行はするものの、もはや九歌のような神との交渉はことごとく失敗する。伝統的な巫の文化からは一歩進んだものであり、社会の混乱によって共同体の宗教的な結びつきが破壊されたことを反映していると考えられる。

哀郢は古来、屈原が郢都を追われて東へ向かう途上で、その憂いを歌ったものと解されてきた。王逸は「九章」全体について

九章者、屈原之所作也。屈原放於江南之野、思君念國、憂心罔極、故復作九章。章者、著也、明也。言己所陳忠信之道、甚著明也。卒不見納、委命自沈。楚人惜而哀之、世論其詞、以相傳焉。

「九章」なる者は、屈原の作りし所なり。屈原、江南の野に放たれ、君を思い国を念い、憂心、極まる罔く、故に復た「九章」を作る。章なる者は、著なり、明なり。言うところは己の忠信の道を陳ぶる所、甚だ著明なるなり。卒に納れられず、命を委ねて自ら沈む。楚人、惜しみて之を哀しみ、世に其の詞を論じ、以つて相伝う。

と云い、この一連の作品は都を追放された屈原が憂国の念に駆られて作ったものと解している。

哀郢の前半ではまず「皇天之不純命（皇天の命を純らにせず）」^{ちば}によって民が離散し、仲春の日に東遷することになったことから歌い出され、郢の国門を出て長江に従い流れていくさまが描かれる。

皇天之不純命兮、何百姓之震愆。民離散而相失兮、方仲春而東遷。去故郷而就遠兮、遵江夏以流亡。出國門而軫懷兮、甲之朝吾以行。發郢都而去闔兮、招荒忽其焉極。楫齊揚以容與兮、哀見君而不再得。

天命はもはやまっすぐではなくなり、民たちはひたすら震えおののいている。民は離散して離ればなれになり、この春二月に東へと移っていった。故郷を去って遠くへ行こうとし、江水と夏水に沿って落ちのびていった。都の門を出て心を痛めながら、きのえの日の朝に出発したのだ。郢の都をたつて村里を去り、悲しみのあまりぼんやりとするばかり。楫を一斉に上げて船は進まず漂い、わが君に会おうとしても二度とできないのが悲しい。

このくだりは楚の頃襄王元年、楚が秦に攻められて大敗し、懷王が秦に拉致された時のこととする説¹、頃襄王二十一年に秦の白起が郢都を落としたのを屈原が聞いてそれを悲しんだとする説²と、飢饉によって民が離散したことを屈原が嘆いたものとする説³とがある。しかしこれだけを見れば、単に離散民とともに郢都を逃れた楚の士大夫の歌だと言われても違和感のない語り口である。次の段では、

望長楸而太息兮、涕淫淫其若霰。過夏首而西浮兮、顧龍門而不見。心嬋媛而傷懷兮、眇不知其所蹠。順風波以從流兮、焉洋洋而爲客。凌陽侯之汎濫兮、忽翺翔之焉薄。心絪結而不解兮、思蹇產而不釋。將運舟而下浮兮、上洞庭而下江。去終古之所居兮、今逍遙而來東。羌靈魂之欲歸兮、何須臾而忘反。

大きな楸^{ひさぎ}の木を望み見てはため息をつき、涙はあられの如くはらと流れ落ちる。夏首を過ぎて西へ流れていけば、龍門を振り返ってももう見えない。心は後ろ髪を引かれながら千々に乱れ、見渡す限り踏むべき土地はどことも知れない。風と波に従って流れのまにまに、果てしない水に浮かんで旅人となっているのだ。陽侯（波の神）が起こす大波を乗り越え、突然高く舞い上がってどこへ行こうというのか。心はむすばれたまま晴れず、思いはふさいだまま解きようもない。船を進めて河を下つていき、洞庭湖に入つてまた長江を下つていく。祖先の居る永遠の土地を去り、今さまよいながら東へとやつてきたのだ。ああ、私の魂は帰ろうと求めている、どうして片時も帰ることを忘れられよう。

作者の去りがたい思いと、江を東へ下りながら經由する地点とが交互に描かれる。夏首を過ぎたところで、郢都の東門とされる龍門は見えなくなり、心が晴れないまま舟は洞庭に入り、長江に出る。そうして「終古之所居（終古の居る所）」を去って、「逍遙」として東にやつて来たと言ふ。

登大墳以遠望兮、聊以舒吾憂心。哀州土之平樂兮、悲江介之遺風。當陵陽之焉至兮、森南渡之焉如。曾不知夏之爲丘兮、孰兩東門之可蕪。

大きな丘に登って遠くを眺め、少しでも私の憂いを発散させよう。だが広がる大地の平和なさまはかえって私を悲しませ、長江のあたりに残る昔の風俗もまた私を悲しませるのだ。陵陽（地名）を越えてどこへ行くのか、果てしない水を南に渡ってどこへ行くのか。夏水が變じて丘になる時が来たとしても、郢都の両東門を荒れさせることなどできようか。

丘に登って遠くを見渡し、「吾が憂心を舒」べようとするが、平和な土地を見ても、その地に残る風俗を見ても、悲しみが募るばかりである。この後雰囲気が一転し、忠臣が奸臣に妨げられることへの恨みが語られる。

忽若去不信兮、至今九年而不復。慘鬱鬱而不通兮、蹇侘傺而含感。外承歡之沟約兮、謹在弱而難持。忠湛湛而願進兮、妒被離而郢之。…… 亂曰、曼余日以流觀兮、冀壹反之何時。鳥飛反故鄉兮、狐死必首丘。信非吾罪而棄逐兮、何日夜而忘之。

突然郢を去って君主に信じられず、今まで九年にもなるのに戻れないのだ。心は慘憺として沈んだまま晴れず、ああ、がっかりしたままこの愁いに耐えるしかない。外では君主の機嫌をとってへつらう連中は、心の内ではだらしなく節操も持ちようがない。忠臣は真心を持って進み出ようとしても、ねたみが広がって妨げられたのだ。

亂に曰く、目にははるか遠くを見渡してみれば、ただ帰りたいと願ってもかなうのはいつの日か。鳥は飛んで故郷に帰り、狐は古巢に頭を向けて死ぬというのに。全く私の罪でもないのに放逐されたのだ。昼も夜もどうして故郷を忘れられようか。

乱辞に至って、「吾が罪に非ずして棄逐せらる」と、主人公が故なく放逐されたことが告白される。この句だけを見る限り、屈原をその主人公として連想するには十分であるが、前半の流亡をうたう部分の自己主張の薄さに比べると、後半はやはり異質に見える。

以上を要するに、哀郢は

郢都の国門を出発↓楚の各地を経由しながら「君主に会えない」ことを哀しむ↓丘に登って遠望するも悲しみは深まる↓奸臣への恨みを述べる

という構成になっており、離騷の遊行のような幻想的な要素は全く見られず、神話的な辺遠の地名も登場しない。とはいえこの作品の発想が離騷と全く無関係というわけでもない。冒頭で「皇天」が天命を實行しないことが、士民の離散を招いたとうたっているが、離騷では蒼梧山の舜帝廟で己の志を述べるくだりで

皇天無私阿兮、覽民德焉錯輔。夫維聖哲以茂行兮、苟得用此下土。

天はえこひいきがなく、民の徳ある者を選んで自らの輔佐とするもの。聖哲にして立派な行いのある者こそが、この天下を保ち治めることができたのです。

と、天とは本来公平であるはずだと述べており、天問では

皇天集命、惟何戒之。

天はその命を帝たるにふさわしい者に集めるが、その天がどうして帝王を戒めようとするのか。

と、天が王朝に命を下すのに、その天がなぜ王朝に戒めを下すのかと問うている。哀郢の「皇天之不純命兮」はこれらの裏返しであって、国都が陥落して国が滅亡の危機にさらされている原因を、皇天が天命を公平に實行しないことに帰そうとしているのであろう。王逸が「徳美大称皇天、以興君（徳の美にして大なるを皇天と称し、以って君を興す）」と云い、楚王を天にたとえたと解するのには従い難い。離騷や天問ではまだ皇天への信頼が認められるが、哀郢では「不純命」と明言しており、皇天への信頼もはや失われているのである。

一方で、郢都を逃れた主人公は大きな丘に登り、そこで平和な土地を見渡しては新たな悲しみにふける。新たな土地に移動してから丘に登るという行為は、実は『詩経』の開国叙事詩の中にも見ることができ、たとえば幽に居を定めた公劉をうたった「公劉」を見てみると、一章で

篤公劉、匪居匪康。迺場迺疆、迺積迺倉。迺裹餼糧、于橐于囊。思輯用光、弓矢斯張。干戈戚揚、爰方啓行。
 真心ある公劉は、住まうにも安らかではなかった。そこで田畑の畦を区切り、穀物を積んで倉に蓄え、食糧を包み、大小の袋に詰め
 る。皆はむつまじく勢い輝かしく、弓矢を張って持つ。干なやほこ戈、戚おのまきかりや揚ほこを持って、安住の地を探して出発した。

と新たな国都を築く土地への出発をうたい、二・三章で

篤公劉、于胥斯原。既庶既繁、既順迺宣。而無永歎、陟則在巘、復降在原。何以舟之。維玉及瑤、鞞琫容刀。

篤公劉、逝彼百泉、瞻彼溇原。迺陟南岡、乃覲于京。京師之野、于時處處、于時廬旅。于時言言、于時語語。

真心ある公劉は、着いたこの平原を見た。そこは物が多く草が茂り、心になつてその意を告げた。不満を言う者はなく、小高い山
 に登ったり、平原に下りたりして見歩いた。彼の腰に帯びているのは何か。それは玉と瑤のおびだま、鞞飾りに佩刀。

真心ある公劉は、泉の多いところへ行き、広い平原を見渡した。そこで南の丘に登り、都となるべき土地を見渡した。都となる野よ、
 そこで皆が落ち着き、そこで仮住まいを築き、そこで語り合い、そこで笑いさざめいた。

と、丘に登って国都にふさわしい場所を見渡し、皆が語り合つて希望に満ちているさまが描かれる。これには選んだ場所を見渡すことでそ
 の支配権を確認し、豊饒を期待する意味が込められており、本来なら希望に満ちた行為である。それ故主人公も丘に登ることに「憂心を舒
 べることを期待していたのであるが、それとは裏腹に悲しみが増すのである。実は『詩経』でも、小雅においては高台から見渡す行為が災
 いがはびこる状態の象徴として使われているものがあり、たとえば「正月」四章には

瞻彼中林、侯薪侯蒸。民今方殆、視天夢夢。既克有定、靡人弗勝。有皇帝帝、伊誰云憎。

あの林を見れば、薪ほろや蒸たぎばかりが目に入る。民は今まさに危うく、天を仰いでも暗くおぼろげ。天が乱を平らげてくれれば、無道の人が天にも勝とうとすることは無いのに。偉大な上帝よ、誰を憎みたまうのか。

と云い、林を見渡すと雑木ばかりが茂っていることを、小人がはびこることのたとえに用いている⁴。ちなみに「正月」八章には

心之憂矣、如或結之。今茲之正、胡然厲矣。燎之方揚、寧或滅之。赫赫宗周、褒姒威之。

心の憂いは、結び目のように解けない。今年の正月は、どうしてこれほど激しい災いになったのか。野火が空高く上がれば、消えてしまうことはないのに、輝かしきわが宗周を、褒姒が滅ぼしてしまったのだ。

と、褒姒が周を滅ぼしたことをはつきりうたっており、この詩が西周の滅亡と東遷を踏まえていることは疑いない。しかしこの詩は戦乱の悲劇を直接歌うのではなく、その原因をつくった無能な政治家を非難する内容であり、哀郢の後半部分とその発想が似ている。

また「雨無正」は、その前半で西周が減んで士大夫が離散し、諸侯も朝しなくなった様子をうたっており、その構成は哀郢と似る。

浩浩昊天、不駿其德。降喪饑饉、斬伐四國。旻天疾威、弗慮弗圖。舍彼有罪、既伏其辜。若此無罪、淪胥以鋪。

大いなる天は、その徳を盛んにはされなかった。死と飢饉を下し、四方の国を討ち滅ぼした。かすかなる天の暴虐さは、全く思い測れない。罪ある者を捨て置き、その罪を隠してしまうのに、罪なき者は、次々と並んで引つ立てられる。(一章)

「浩浩昊天、不駿其德(浩浩たる昊天は、其の徳を駿いにせず)」「旻天疾威、弗慮弗圖(旻天は疾威にして、慮らず図らず)」は、その言うところが哀郢の「皇天之不純命兮」と酷似する。天が徳を垂れなくなった結果、喪乱と飢饉が起り、罪ある者が罰せられず、罪なき者が次々と罰せられる混乱を招いたといい、続く二章では、

周宗既滅、靡所止戾。正大夫離居、莫知我勦。三事大夫、莫肯夙夜。邦君諸侯、莫肯朝夕。庶曰式臧、覆出爲惡。

宗周は滅んでしまい、もはや行き着く場所もない。上大夫たちは都を離れ、私の勦^つれなど知りもしない。三卿どのも、朝夕の参内をされなくなった。諸国の君主や諸侯たちも、朝夕の参内をされなくなった。よい振舞いをと願っても、かえって悪事をするありさま。

と、周室滅亡後の混乱の様子が描かれる。しかしこの描写は第三者的な視点で描かれており、戦乱と離散をリアルタイムで経験した者の口吻とは考え難い。星川清孝氏は哀郢も戦乱の悲惨さが直接歌われないことを根拠に、秦による郢都陥落を背景としたものではないとしているが⁵、明らかに周の東遷を反映している「正月」や「雨無正」も、異民族侵攻の悲惨さを全く描かないことを考えれば、このような見方は根拠薄弱である。哀郢は郢都陥落からある程度時間がたった後で作られたために、戦乱そのものよりもその結果としての流浪や、その原因を生んだ佞臣への批判が中心的な内容になったと見るべきであろう。

三

涉江は屈原が楚の長江より南に流された時の作と解されている。その中で枉渚を発して辰陽から激浦に至る行程が描かれるが、『史記』屈原列伝には屈原がこれらの地に流されたことは記されない。しかしこの作品の内容も筆致も哀郢に比べると離騷と類似するところが多く、屈原伝説とよりかわりの深い作品であるとは言えるであろう。

その冒頭は離騷と同じく、「余」という一人称で主人公が自らのすぐれた資質を語ることから始まる。

余幼好此奇服兮、年既老而不衰。帶長鋏之陸離兮、冠切雲之崔嵬。被明月兮珮寶璐。

私は若い頃からこの変わった身なりを好み、年老いてもそれは変わらない。長い両刃のきらめく剣を帯び、切雲という山のように高

い冠をかぶる。明月のような玉を身につけ見事な宝石を腰に帯びる。

ところが世に理解されないが故に、高く馳せて崑崙に重華（舜）と遊ばんとする願望を語る。

世溷濁而莫余知兮、吾方高馳而不顧。駕青虯兮驂白螭、吾與重華遊兮瑤之圃。登崑崙兮食玉英、與天地兮同壽、與日月兮同光。

世の人々は混濁して私を知る者もなく、私は今まさに空高く馳せ上がろうとし俗世を振り返らない。青いみずちに乗って白いみずちを添え馬とし、私は重華と崑崙の瑤圃に遊ぼうとする。崑崙に登って玉のはなぶさを食らい、天地と寿命を等しくし、日月と光を同じくするのだ。

そしてそれと対比するように、南方へと流浪する旅が描かれる。

哀南夷之莫吾知兮、且余濟乎江湖。乘鄂渚而反顧兮、欵秋冬之緒風。步余馬兮山皋、邸余車兮方林。乘舲船余上沅兮、齊吳榜以擊汰。船容與而不進兮、淹回水而疑滯。朝發枉渚兮、夕宿辰陽。苟余心其端直兮、雖僻遠之何傷。

南の蛮夷には自分を知る者が無いのを悲しみ、朝に私は湘水を渡ろうとする。鄂渚（地名）に行つて振り返れば、ああ、初冬の寒い風が吹く。私の馬を山の沢地に走らせ、私の車を方林（地名）に止める。小舟に乗って私は沅水をさかのぼり、呉の船の櫂をそろえて波を打ちつつ進む。船はたゆたつて進まず、逆巻く水にとどまって滞る。朝に枉渚を出発し、夕方には辰陽に宿る。もし私の心がまっすぐであるなら、辺遠の地といえども何を悲しむことがあろう。

「朝發○○、夕宿○○」という句形は離騷における天上遊行の場面にも見られる一方、「船容與而不進兮」という表現は哀郢にも類似の句が見られる。しかし哀郢のようにただ悲しむのではなく、「苟余心其端直兮、雖僻遠之何傷（苟し余が心の其れ端直なれば、僻遠と雖も何をか傷

まん」のように主人公の高い志をうかがわせる句が見られるのも、離騒との近さを思わせる。

入激浦余儻個兮、迷不知吾所如。深林杳以冥冥兮、猿狖之所居。山峻高以蔽日兮、下幽晦以多雨。霰雪紛其無垠兮、雲霏霏而承宇。哀吾生之無樂兮、幽獨處乎山中。吾不能變心而從俗兮、固將愁苦而終窮。

激浦に入ると行きつ戻りつ進めなくなり、行く先も知らず迷うばかり。深い林は杳として暗く、猿が住むようなところ。山は険しく高く日を覆わんばかり、谷は暗く雨が降りしきる。あられや雪が果てしなく乱れ舞い、雲は立ち込めて建物を覆う。わが人生に楽しみがなくなつたのを悲しみ、ひとり山中にひっそりという。私は心を変えて世俗に従うこともできず、もとより憂いに苦しんで命を終えるにちがいない。

激浦に入つてもなお迷いは晴れず、猿の住む深山へ入っていく。もはや人生に楽しみがないことを嘆きつつも、変節して「俗に従う」ことはできないと言う。

接輿髻首兮、桑扈羸行。忠不必用兮、賢不必以。伍子逢殃兮、比干菹醢。與前世而皆然兮、吾又何怨乎今之人。余將董道而不豫兮、固將重昏而終身。

楚狂接輿は髪を剃つて狂人を装い、隱者桑扈は裸で歩いて蛮人のふりをしたという。忠臣は必ずしも用いられず、賢人も用いられるとは限らない。伍子胥も讒言にあつて命を落とし、比干も諫言して塩漬けにされた。いにしえの世もそうだったのだ、この上今の人々を恨みはするまい。私は正しい道をためらわず行こう、もちろんこの先あかりも見えぬまま命を終えるとしても。

正しい道を行きながら不遇に終わった歴史人物を挙げつつ、「忠臣や賢者は必ずしも用いられない」というテーゼを述べ、「重ねて昏くして身を終」えんと言う。離騒では主人公が舜帝の廟で同じように歴史人物を引きながら志を述べ、天上への遊行を決意するのであるが、涉江

では「道を董ただすに豫ためらわず」と言いつつ、死を暗示するような結び方である。

亂曰、鸞鳥鳳皇、日以遠兮。燕雀烏鵲、巢堂壇兮。露申辛夷、死林薄兮。腥臊並御、芳不得薄兮。陰陽易位、時不當兮。懷信侘傺、忽乎吾將行兮。

亂に曰く、鸞鳥も鳳凰も、日に日に遠く去っていく。燕や雀、烏や鵲が、君主のお出ましになる明堂に巢をかける。露申や辛夷のよくなかぐわしい木が、草むらに枯死する。生臭いものが進められ、かぐわしいものは近づくこともできない。陰と陽のあるべき場所が入れかわってしまい、時代は中正ではなくなってしまった。信念を抱いて立ち尽くしていたが、私はふと思いきって遠く行こうとするのだ。

乱辞では世の秩序がすべてひっくり返ってしまっている様を嘆いた後、「吾將行」と結ぶ。「侘傺」という語は離騷にも見え、讒言にあった主人公が女嬃のところへ行く前に、乱れた世を嘆く場面に出てくる。

侘鬱邑余侘傺兮、吾獨窮困乎此時也。寧溘死以流亡兮、余不忍爲此態也。

憂いあまり鬱々としながら私は立ち尽くし、ひとりこの時世に進退窮まっているのだ。たとえ急死して行方知れずになってしまおうとも、私はこの奸臣どものような生き方はできないのだ。

奸臣がはびこる世に合わせて生きるくらいならむしろ死んだ方がいいと、節操を堅持する決意を表明する。涉江の「懐信侘傺、忽乎吾將行兮（信を懐いて侘傺し、忽乎として吾は將に行かんとす）」も、恐らくこれと同様の文脈であろう。「將行」は、離騷に「靈氛既告余以吉占兮、歷吉日乎吾將行（靈氛 既に余に告ぐるに吉占を以ってし、吉日を歴えんで吾は將に行かんとす）」とあるように、新たな遊行に出ることを表す語であるが、ここでの「將行」は、新たな世界へ旅立つよりも、むしろ死のイメージの方がより強くなっている。

なお離騷のこの部分の直後には、

步余馬於蘭皋兮、馳椒丘且焉止息。進不入以離尤兮、退將復脩吾初服。製芰荷以爲衣兮、集芙蓉以爲裳。不吾知其亦已兮、苟余情其信芳。私の馬を蘭の咲く沢地に歩ませ、山椒の香る丘に馳せてしばらくここに休んだ。進んでも受け入れられずこのとがめに遭ったが、今は退いて私の信条を確かめてみよう。芰ひしと荷はすで上着を作り、蓮の花を集めて裳裾を作った。(そんな清らかな生き方をしてきた)私をわかないのなら仕方がない、いつも私の心情は本当にかぐわしいものだったのだ。

とあり、この後女嬃の勧めで蒼梧の舜帝廟に赴き、そこで天上遊行を決意する。「步余馬於蘭皋兮(余が馬を蘭皋に歩ます)」「苟余情其信芳(苟に余が情は其れ信に芳し)」という句は涉江にも同様のものがあり、やはり離騷との近さをうかがわせる。しかし離騷では天上遊行にも描写の重点が置かれているのに対し、涉江では天上遊行を思わせる崑崙への旅自体は描かれず、その前段階としての現実世界の彷徨のみが描かれる。しかも主人公は離騷のように芰荷や芙蓉を身にまとうこともなく、その彷徨は次第に山の奥深くに入っていく、進退窮まってしまふものである。もはや宗教的な天界遊行に救いを求めることすらままならないという、離騷よりも一步進んだ主人公の窮状がうかがえるのであり、いよいよ末期的な混乱に陥った楚国の現実もそこに反映しているのであろう。

ところで九章において重華は懷沙にも見えており、「重華不可遯兮、孰知余之從容(重華 遯うべからざれば、孰か余の從容を知らん)。」とある。舜にもう会えないのなら、誰が私のあるがままの姿を知ろうと嘆いた後、

懲違改忿兮、抑心而自彊、離愍而不遷兮、願志之有像。進路北次兮、日昧昧其將暮。舒憂娛哀兮、限之以大故。

あやまちに懲りて怒るのをやめ、心を抑えて自らつとめよう。憂いに遭っても心を移さず、私の志を手本にするものがあらんことを願う。道を進んで北に宿ると、日は暗くもう暮れようとしている。憂いをはらし悲しみを慰め、己の死をもって終わりとしよう。

と、もう怒るのをやめて己を強く保ち、「大故」をもって終わりにしようという、死を暗示する言葉で結ぶ。「重華」に会うことがもはやかなわぬ故に、渉江のようにより次元の高い世界へ遊行しようとするのではなく、ここで命を終えてしまおうとするのである。そもそも『楚辞』において舜は「舜」の名で見える場合は、

彼堯舜之耿介兮、既遵道而得路。(彼の堯舜の耿介なる、既に道に遵いて路を得たり。) (離騷)

舜関在家、父何以鯁。(舜は関えて家に在り、父、何を以つてか鯁にする。) (天問)

彼堯舜之抗行兮、瞭冥冥而其薄天。(彼の堯舜の抗行は、瞭として冥冥として其れ天に薄る。) (哀郢)

堯舜皆有所舉任兮、故高枕而自適。(堯舜皆な任に挙ぐる所有り、故に枕を高くして自適す。) (九辯)

の如く、鑑とすべき聖天子であるが、「重華」の名で見える場合は、

濟沅湘以南征兮、就重華而陳詞。……跪敷衽以陳辭兮、耿吾既得此中正。馳玉虬以乘鸞兮、溘埃風余上征。朝發軔於蒼梧兮、夕余

至乎縣圃。(沅湘を濟りて以つて南征し、重華に就きて詞を陳べん。……跪いて衽を敷きて以つて辭を陳べ、耿かに吾は既に此の中正を得たり。玉虬を馴として以つて鸞に乗り、埃風を溘して余は上征す。朝に軔を蒼梧に発し、夕に余は県圃に至る。) (離騷)

駕青虬兮驂白螭、吾與重華遊兮瑤之圃。(青虬を駕して白螭を驂とし、吾、重華と瑤の圃に遊ばん。) (涉江)

重華不可還兮、孰知余之從容。(重華、還うべからざれば、孰か余の從容を知らん) (懷沙)

の如く、蒼梧山の廟に祀られ、主人公の志を理解してくれるであろう存在であり、また崑崙へと導いてくれる存在でもある。ちなみに一九七三年に長沙馬王堆三号漢墓から出土した帛書地図の一つ「地形図」には、九嶷山とみられる九つのがった山巔を持つ山が大きく描かれ、その横に「帝舜」という文字が大きく書かれており、漢初には舜と重華、また蒼梧山と九嶷山は同一視されるようになっていたと

みられる。重華は楚人の信仰に重要な役割を果たしていたのであり、主人公にとつての重華とは、まさしく天界遊行の手助け、あるいは後押しをして、自らの志をかなえてくれる存在だったのではなからうか。

離騷の主人公は重華に志を述べたおかげで、その後天界へと遊行できた。しかし涉江や懷沙の主人公は、重華に志を述べることすらかなわず、死を選ぶ他はなかつたのである。

四

九章の中でも現実的な彷徨を描いているとされる哀郢と涉江は、このように見てくると、必ずしも完全な現実の反映とは言えないことがわかる。離騷における「重華に志を述べる↓天界へ旅立つ」という幻想的な遊行が、涉江では重華とともに崑崙から天界へ旅立つとうとして、もはや助けてはくれないという、悲哀を込めた地上の彷徨へと変質しているのである。

哀郢はこれに比べると、現実世界の彷徨の性格がより強い。『詩経』の変雅と共通するモチーフを多く用いており、乱辞でも死や天界への新たな遊行を示唆する言葉はない。もちろんこれによつて哀郢が『詩経』を模して作られた作品であると直ちに判断するわけにはいかないが、『春秋左氏伝』には

十月、鄭伯如楚、子産相。楚子享之、賦吉日。既享、子産乃具田備、王以田江南之夢。

十月、鄭伯 楚に如き、子産 相く。楚子 之を享し、「吉日（小雅。狩獵のさまをうたう）」を賦す。既に享し、子産 乃ち田備（狩獵の用具）を具え、王 以に江南の夢（雲夢沢）に田す。（昭公三年）

の如く楚人が詩を賦したり、

楚子救鄭、司馬將中軍、令尹將左、右尹子辛將右。過申、子反入見申叔時、曰「師其何如。」對曰「德・刑・詳・義・禮・信、戰之器也。德以施惠、刑以正邪、詳以事神、義以建利、禮以順時、信以守物。民生厚而德正、用利而事節、時順而物成。上下和睦、周旋不逆、求無不具、各知其極。故詩曰『立我烝民、莫匪爾極。』是以神降之福、時無災害、民生敦龐、和同以聽。莫不盡力、以從上命、致死以補其闕。此戰之所由克也。」

楚子 鄭を救わんとし、司馬（子反）中軍に將たり、令尹（子重）左に將たり、右尹子辛 右に將たり。申を過り、子反 入りて申叔時に見え、曰く「師は其れ何如」と。對えて曰く「德・刑・詳・義・禮・信は、戰の器なり。德以つて惠を施し、刑以つて邪を正し、詳（祥）以つて神に事え、義以つて利を建て、礼以つて時に順い、信以つて物を守る。民生 厚くして德は正され、用 利なれば事は節せられ、時 順なれば物 成る。上下 和睦し、周旋して逆らわず、求めて具わらざるは無く、各おの其の極を知る（分をわきまえる）。故に詩に曰く『我が烝民を立つ、爾の極に匪ざるは莫し（周頌・思文）』と。是を以つて神は之に福を降し、時に災害無く、民生 敦龐にして、和同して以つて聴く。力を尽くして、以つて上命に従い、死を致して以つて其の闕を補わざるは莫し、此れ戰の克つ所由なり」と。（成公十六年）

の如く、楚人と会見した他国の人物が詩を引いたりする場面も見られるから、楚の士大夫が『詩経』を全く知らなかったとは考え難い。哀郢の作者として『詩経』に通じた人物を想定するのは、あながち武断とは言えないであろう。少なくとも哀郢と涉江の間に大きな断層があるのは確かである。

とはいえ哀郢も幻想的・宗教的な世界と全く無縁であったわけではない。たとえば「去終古之所居兮、今逍遙而來東。羌靈魂之欲歸兮、何須臾而忘反。」と、「靈魂」が郢都へ帰ろうと願う句がある。ここでの「終古」という語は九歌・礼魂にも見え、

成禮兮會鼓、傳芭兮代舞、婁女倡兮容與。春蘭兮秋菊、長無絶兮終古。

神に礼を行つて太鼓を一齐に鳴らし、巫は香草を手渡しながら代るがわる舞い、美しい乙女がゆつたりと歌う。春には蘭、秋には菊、

いつまでも絶えることなく永遠ならんことを。

という。ここでの「終古」は、春には蘭、秋には菊を捧げる季節の循環が永遠に続く状態であり、美しい娘たちは循環する時間の流れに「容與」として身を任せている。ところが哀郢では郢都陥落によって、永遠に循環する「終古」の時間から切り離されてしまったために、本来そこにあるべき「靈魂」が「終古の居る所」へ帰ろうと願うのである。九歌にうたわれる、神を祀ることで人々が幸福な結びつきを保っていた時代へは二度と戻れなくなったことへの嘆きも、「羌靈魂之欲歸兮、何須臾而忘反。」の二句に込められているのであろう。

なお「靈魂」が郢都へ帰ろうと願う表現は、同じ九章の抽思の末尾にもあり、

惟郢路之遼遠兮、魂一夕而九逝。曾不知路之曲直兮、南指月與列星。願徑逝而未得兮、魂識路之營營。

郢の都への道ははるかに遠いが、魂は一晚に九回も通う。だが生身の私は道の曲直さえ知らず、南のかた月と並ぶ星とを指すばかり。直ちに行きたいと願ってもかなわず、魂だけが道を知っていて何度も通うのだ。

と、離騷のような天上遊行を彷彿とさせる。「魂」は「徑ちに逝くを願いて未だ得」られない路を識って營々と通うのであり、あたかも郢都を天上への入り口である崑崙に見立てているかのようである。

このように見てくると、哀郢で「哀見君而不再得（君に見えんとして再び得ざるを哀しむ）」という句が唐突に現れるのも、現実的には郢都を追われて楚王に謁見できなくなったことを指しているにせよ、「終古」の場所で神を迎えることがもはやかなわなくなったという意識がそこに反映しているのではないだろうか。

ところで九章の中にも、離騷に似た幻想的な遊行が描かれる作品がある。九章では比較的後期の作品とされる悲回風がそれで、主人公が

凌大波而流風兮、託彭咸之所居。上高巖之峭岸兮、處雌蜺之標顛。據青冥而攄虹兮、遂儻忽而捫天。吸湛露之浮源兮、漱凝霜之雰雰。

依風穴以自息兮、忽傾寤以嬋媛。馮崑崙以瞰霧兮、隱岐山以清江。憚涌湍之磕磕兮、聽波聲之洶洶。……

借光景以往來兮、施黃棘之枉策。求介子之所存兮、見伯夷之放跡。心調度而弗去兮、刻著志之無適。曰吾怨往昔之所冀兮、悼來者之
愁愁。浮江淮而入海兮、從子胥而自適。望大河之洲渚兮、悲申徒之抗跡。

大波を越えて風にまかせ、彭咸の居るところに身を任せよう。高い岩の険しい崖に登り、雌蜺メダカのいただきに立つ。深い青空から虹を架け延ばし、そのまま素早く上つて天を撫でて探る。しどどにぬれた冷たい露をすすり、乱れて下りた霜で口をすすぐ。風の出る穴に
よりかかつて休もうとすると、ふと我に返つてはまたぼんやりとする。崑崙に上つて立ち込める霧を眺め、岐山に上つて清らかな長江
を眺める。急流がごうごうと鳴るのにおのきながら、波の逆巻く音をじつと聴く。……

目を重ねて往来し、黄色の茨の曲つたむちで馬を御す。介子推のいるところを探し求め、伯夷の隠棲した跡を見る。この二人の格調
法度ある生き方を心にして忘れず、その志を胸に刻んで他に心を移さないようにしよう。私は昔願ったことが果たされないのを残念に
思い、将来の憂いを畏れ悲しむのだ。江淮の流れに浮かんで海に入り、伍子胥の生き方に従つて行こう。黄河の中州を望んでは、申徒
狄の高潔な行いの跡を悲しく思うのだ。

と、「彭咸の居る所」を探して崑崙などの地を訪ねた後、介子推・伯夷・伍子胥・申徒狄などの節操を堅持した古人を思いながら、江淮や
黄河へ彷徨する描写がある。このテーマは離騷に似ているが、離騷では崑崙から天上に昇つて遊行し、拒絶されて戻つた後、地の果ての神
話的世界へ遊行してから「彭咸の居る所」へと旅立つのに対し、悲回風では崑崙から天に昇ろうとはせず、古の高潔な人物にゆかりのある
場所をめくり、最後は江淮から海へ向かうが、結局心は晴れないまま終わってしまう。離騷に見える表現やモチーフを多用しながら、あた
かも離騷を鏡にうつしたかのような展開になっているのであり、もはや天界遊行にさえ救いを求めることができないという主題は、涉江と
共通する。

このように九章における主人公の彷徨は、涉江や悲回風では離騷にみられる蒼梧↓崑崙↓天界という遊行の流れが意識されていて、その
ベクトルを天上とは逆方向に向けることにより、もはや天界遊行も悲惨な現実を救うには無力であることを際立たせていると言える。これ

に対して哀郢では、離騷のような天界遊行のモチーフは用いられず、『詩経』の現実主義的精神の影響もうかがえる一方、九歌における神と人との幸福な関係を永遠に約束された世界を念頭に置きながら、それがもはや回復できないことを嘆いているとみられる表現もある。これらの作品は根本的なテーマは共通しているとはいえ、その背景には大きな隔たりがあるのであり、少なくとも同一人物が一度に作ったとは考え難いものであろう。

附記 本論文は二〇〇九年十月に中国広東省深圳市で開催された「二〇〇九年楚辞国際学術研討会暨中国屈原学会第十三届年会」における口頭発表「論《九章》諸篇主人公的彷徨」をもとにしたものである。また本研究は科研費（課題番号21320068）の助成を受けたものである。

注

- 1 戴震『屈原賦注』音義下「屈原東遷、疑即當頃襄元年、秦發兵出武關攻楚、大敗楚軍、取析十五城而去。時懷王辱於秦、兵敗地喪、民散相失、故有『皇天不純命』語。また湯炳正『《九章》時地管見』（同『屈賦新探』（齊魯書社、一九八四年）所収）等。
- 2 王夫之『楚辭通釈』「哀故都之棄捐、宗社之丘墟、人民之離散、頃襄之不能效死以拒秦、而亡可待也」。また蔣天樞『楚辭校釈』（上海古籍出版社、一九八九年）、王泗原『楚辭校釈』（人民教育出版社、一九九〇年）等、現代の注釈家の多くはこの説を採る。
- 3 王逸『楚辭章句』「言懷王不明、信用讒言而放逐己、正以仲春陰陽會時、徙我東行、遂與室家相失也」、朱熹『楚辭集注』「屈原被放時、適會凶荒、人民離散、而原亦在行中、閱其流離、因以自傷」等。
- 4 『詩経』における登高の意味とその変容については、拙稿「論《詩経》中的『瞻』与『望』」（『第六屆詩経国際学術研討會論文集』、学苑出版社、二〇〇五年）を参照。
- 5 星川清孝『楚辭の研究』（養徳社、一九六一年）三五五〜三五六頁
- 6 「地形図」の写真・復元図・釈文等は『中国古代地図集 戦国―元』（文物出版社、一九九〇年）20〜24図参照。
- 7 「終古」の語義については、小南一郎『楚辭とその注釈者たち』（朋友書店、二〇〇三年）第一章第二節「終古の語義——永遠について」に詳細な論考がある。